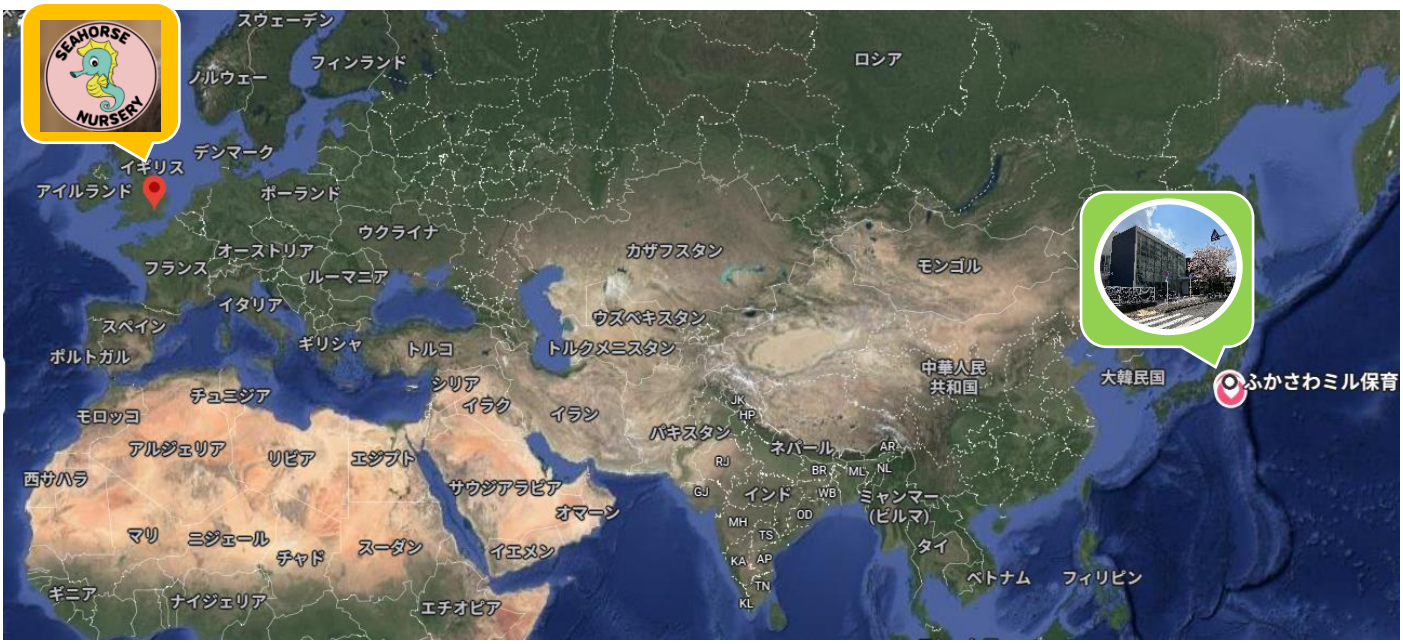
園長コラム～みんなが笑顔になれる保育園への道～　2025 年8月号

認知革命（フィクションを信じ協力する力）～サピエンス全史から～

＜イギリスの保育園との国際交流＞

●ご報告が遅くなりましたが、6月26日に縁あってイギリスの保育園とオンラインでの国際交流を行う機会に恵まれました。Zoom ミーティングで保育園間を繋ぎ、リアルタイムに園児同士が交流する取り組みはミル保育園では初の試みでした。相手先の保育園では4歳児クラスが年長であったことと、Zoom というチャネルの性質上、大人数での通信が不向きであったことから、今回はもりもり組のみの参加となりました。

（交流先保育園 URL　https://seahorsenursery.co.uk/）



●交流では、動物の鳴き声や野菜・フルーツの名前についてのクイズをお互い出し合い、それぞれ日本語と英語ではどのように言うかを順番に発表しあったり、ミル保育園の給食メニューを写真で紹介したりしました。スクリーンに映る自分たちの姿、そこに並んで映るイギリス人のお友達の姿に大興奮のもりもりさんでしたが、発表のためにカメラを向けられると、緊張して途端に沈黙してしまう子どもらしく可愛らしい姿がありました。また、約９時間の時差があることや、通信がやや遅れて相手方に届くところにも、なぜそうなるの

かを私から説明すると神妙な面持ちで耳を傾けてくれました。



●今回の交流はミルの保護者様がご縁を繋いでくださったことで実現しました。貴重な機会にこの場を借りて御礼申し上げます。なお、本交流は肖像権保護の観点から相手側施設との取り決めにより活動中の画面録画・撮影等は双方で行っておりません。

●それにしても、こんなに簡単に海外の保育園とリアルタイムで通信できるようになる日が来るなんて、少なくとも私が子どもの頃には思いもしなかったことです。それだけ科学技術は飛躍的に進歩しており、今後 AI によってそのスピードはますます上がっていくことが容易に想像できます。

＜話は前回に引き続き『サピエンス全史』へ＞

●さて、ユヴァル・ノア・ハラリ氏著『サピエンス全史』の中では、ホモ・サピエンス史上ここまで科学技術が急速に進歩した理由として、今から 500 年ほど前に起こった「科学革命」の存在を挙げていますが、ハラリ氏はそれ以外にもホモ・サピエンス繁栄の理由として約 1 万年前に起こった「農業革命」と、約 7 万年前に起きた「認知革命」の存在を挙げていますので以下それぞれ順を追ってご紹介します。

＜認知革命＞

●本書を読むまでの私は、ホモ・サピエンスは、その名（サピエンス＝“賢き者”の意味）のとおり高度に発達した大きな頭脳を持ち、遺伝子的に優秀だからこそ、地球上で唯一生き残った人類だと思っていました。しかし現実はそうではなかったようです。実際、当時のネアン・デルタール人は、ホモ・サピエンスよりも大きな頭脳と屈強な肉体を有し、指先は器用で火や道具を使いこなし、言語も自由に操っていたということが、研究により分かっているそうです。

●では、我々ホモ・サピエンスはなぜ、強敵ネアン・デルタール人との生存競争に打ち克つことができたのでしょうか。それはホモ・サピエンスだけに突然変異的にもたらされた「認知革命」があったからだと、ハラリ氏は言います。



●**認知革命**とは、**「フィクション（虚構）を信じ、語ることのできる能力」**のことを言います。この同じフィクション（想像上の現実）を信じる力によって、ホモ・サピエンスは多くの仲間と一致協力することが可能となりました。

●身近な仲間と協力する力は、ネアン・デルタール人にも備わっていた能力でしたが、形成できる集団の規模が違いました。ネアン・デルタール人が親密な人間関係を維持しようとしても、脳の大きさから考えて 150 人が限界（ダンバー数）であったことが分かっているそうです。しかしながら認知革命によってホモ・サピエンスは、例えば「神話」という同じフィクションを信じることで、それまで全く面識のなかった人々でも同じ掟やルールに従い、統率のとれた協力行動

をとることが出来たのです。
●その上、このフィクションは時代の変化に応じて柔軟に別のフィクションに入れ替えることができました。こうしてホモ・サピエンスは次々と新しい神話やイデオロギーを生み出し、集団の規模を拡大して、ネアン・デルタール人を含む他の人類を陵駕していったと考えられるのです。

＜農業革命＞
●認知革命により集団の力を獲得したホモ・サピエンスは、約1万年前から農業を始めました。それまでの移動しながらの狩猟採集生活から、一定の場所にとどまり、小麦や稲、トウモロコシを作り、鶏や豚、牛などの家畜を育てるようになったことで食糧は増え、人口は爆発的に増加しました。他方、狩猟採集時代よりも労働時間は長くなり、新たな感染症や貧富の差を生むなど、個人の生活は必ずしも良くなったとは言えないとハラリ氏は結論づけています。

＜国、宗教、お金～人類が生み出した 3 大フィクション～＞
●こうして、人口がどんどん増えると更なる大集団をまとめるためのフィクションが新たに生み出されました。フィクションの中で大きな3つが、国と宗教とお金です。なかでもお金の力は絶大でした。客観的な現実から言えばお金は単なる金属片または紙切れにすぎませんが、その価値（想像上の現実）をみんなで信じることにより、物々交換よりもはるかに便利になり、人類は世界中のまったく見ず知らずの人と協力して何かを成し遂げることができるようになったのです。

＜科学革命＞
●そして、ホモ・サピエンスが史上空前の発展を遂げたのは、西暦 1500 年頃から始まった科学革命によってです。そこからわずか 500 年で、人口は 14 倍、生産量は 240 倍、エネルギー消費量は 115 倍に増えました。科学革命によって人類は宗教よりも科学に答えを求め始め、帝国は力の獲得のために科学に投資しました。この

ように科学は帝国主義と結びつき、そこに資本主義という宗教に代わる新たなフィクション(イデオロギー)が加わることで、より一層科学技術の躍進を支えていったのです。

＜本書の結論と問題提起＞

●以上、大分急ぎ足で見てきましたが(本書は具体例に富み面白いのですが長いんです…)ホモ・サピエンスはフィクションを信じ、またフィクションの形を時代に合わせ変化させていくことで、大規模な協力集団の力を武器に地球上唯一の人類として繁栄してきました。食物の生産量を増やし、都市を築き、国を立て、広大な交易ネットワークを作り上げ、科学によってもたらされた AI は人類を追い越す程度にまで発展したというのが、本書の仮説であり結論です。

●ところが、ハラリ氏は本書の終盤で次のような問題を読者に投げかけます。ここまで進化した人類は、狩猟採集時代に比べて本当に幸福になったのか。ホモ・サピエンスは果たしてこの先も安泰か。多くの動物(家畜など)たちの犠牲や受難の上に成り立つ人類の幸福とは…。こうした哲学的な問いかけで本書は幕を閉じます。非常に興味深く、考えさせられる内容でした。

＜認知革命と保育の役割＞

●最後に認知革命を保育の役割という視点で考えてみます。本書を読み、認知革命によって人類が獲得したスキルとは、要するに「大勢の他人が信じられるフィクション(想像上の現実)を創り出し、同じ目標に向かって一致協力していく力」だと、私は理解しました。それは「リーダーの資質」と言い換えてもよいかもしれません。

●では、こういった力を保育を通じて乳幼児期の子どもたちに育むために必要なことは何か。私は次の2点が重要なのではないかと考えています。

●1点目は「共感力」です。他人の思いに共感し、寄り添うことができるからこそ、その人が発するフィクションは他人の心に刺さります。共感力は集団生活の中で最も磨かれます。乳幼児段階から保育園

のような集団の中で、挑戦と失敗を繰り返し、自他の違いや共通点、強者と弱者それぞれの思いや心の痛みなど諸々を経験から子ども自身が学んでいくことが大切です。もちろんそこには共感力のある保育者の情緒的な支援が不可欠であり、私たちの責任の重さとやりがいを感じます。

●2点目は「**道徳性**や**倫理観**」です。フィクションの道は、全人類の幸福の方角に向かっていなければなりません。ここで思い出したのが、京セラ株式会社創業者の故稲盛和夫氏が自身の経営哲学（フィロソフィ）として残している次の方程式です。

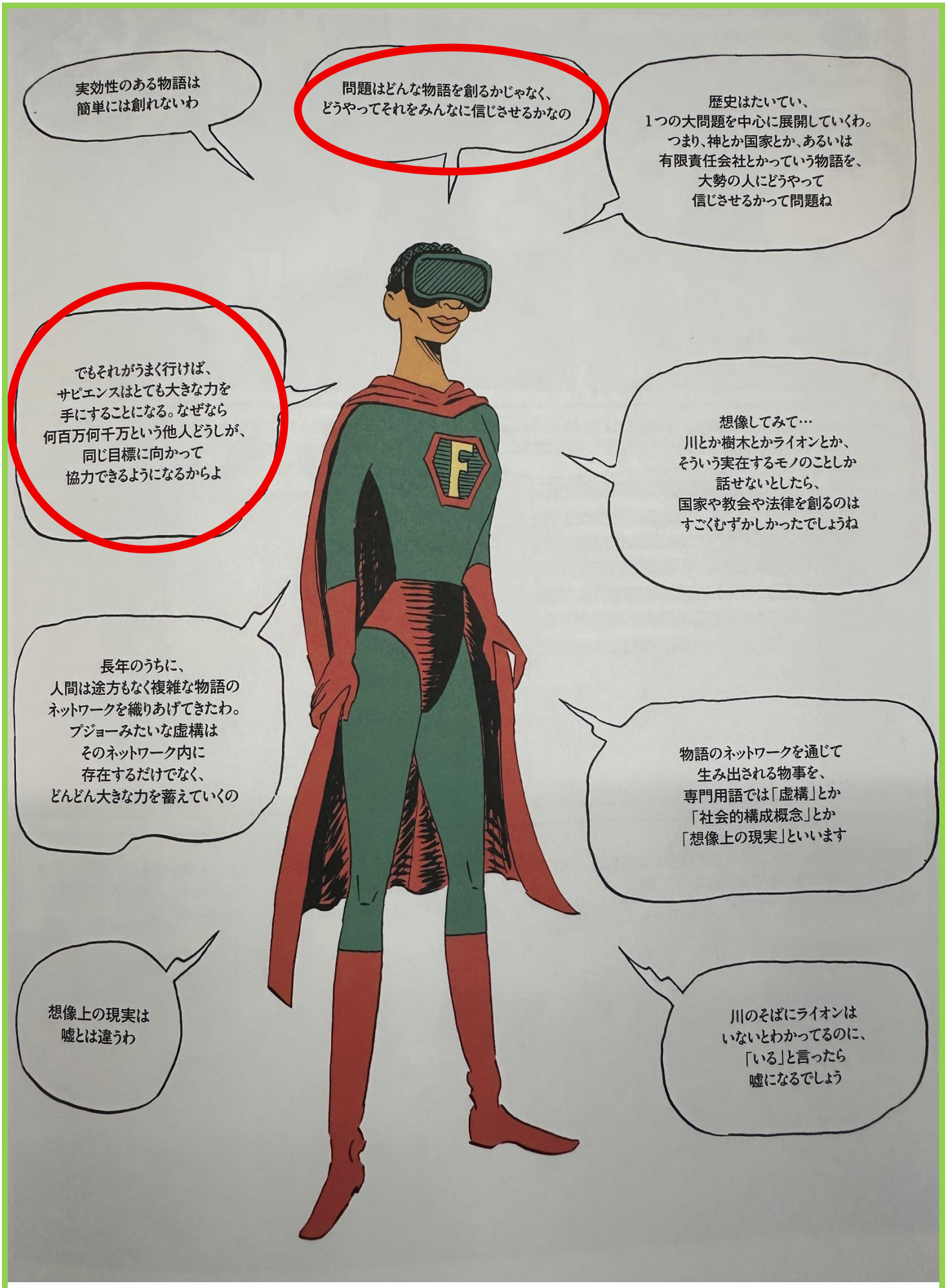
「人生や仕事の結果」＝「考え方」×「熱意」×「能力」
（-100～100）　（0～100）　（0～100）

●着目すべき点は、熱意や能力にはマイナスがないのに対し、**考え方にはマイナスがある**ということです。つまりどんなに熱意があって能力が優れている人でも、考え方のベクトルが誤っていれば、成果はゼロどころか大損害に繋がりかねないということを意味します。

●このことは、人類が創り出すフィクションにも同じことが言えるのではないでしょうか。持続可能で豊かな人類の未来のためのフィクションの創り手には常に正しい道徳性や倫理観が求められますし、それはフィクションの受け手（信じる）側であっても、それが本当に信じるに足るものかを正しく吟味することは重要です。

●特に SNS やネット配信等によってエコーチェンバー※が起こりやすい現代社会では、多様性や情報との付き合い方もさることながら、一人ひとりの子どもの道徳性や倫理観を育む教育についても見直されるべきではないかと考えています。保育園でも、例えば古事記の「因幡（いなば）の白兎（しろうさぎ）」など、乳幼児でも親しみやすいエピソードやその中の登場人物（大国主命など）の心情を通じた心の教育にも取り組んでいきたいと思います。**園長　橋本　英明**

※エコーチェンバー・・・自分と似た意見や思想を持った人々の集まる空間内でコミュニケーションが繰り返され、自分の意見や思想が肯定されることによって、それらが世の中一般においても正しく間違いないものであると信じ込んでしまう現象のこと。似たような用語に「フィルターバブル」がある。



（引用：漫画　サピエンス全史（人類の誕生編）ユヴァル・ノア・ハラリ著　河出書房新社）